

【テーマ】 建築遺産の地域資源化と地域創生ーヴォーリズ建築の保存再生から見えることー

【講師】 関西学院大学名誉教授 ヴォーリズ研究センター長 角野幸博 先生

【担当教員】 佐藤教授

【日時】 2024年11月22日（金）18:30～21:20

【場所】 大阪公立大学大学院 都市経営研究科 梅田サテライト 101 教室

【参加者】 都市政策・地域経済コース M1 学生 他

## ■ 講義概要

W.M. ヴォーリズが関与した建築を通じて、建築遺産を地域資源化し、地域創生を図る方法に関してご講義をいただきました。保存、転用、建替えという三つのアプローチについて、事例を通じてご紹介いただき、文化的・経済的価値の両立を目指す道筋をご講義いただきました。また、現存するヴォーリズ建築の特徴だけでなく、それらの課題についても触れていただき、建築遺産の継承意義と課題を学びました。

## ■ 講義内容

### 1. 建築遺産の観光資源化と地域資源化

建築遺産はその建物自体の価値だけでなく、建物群としての街並みにも価値があるケースもあり、文化財保護法の中にも重要伝統的建造物群として制度化されている。さらに建物のコンテンツの価値もあり、教会や寺院などの宗教施設であったということに価値があるケースもある。このように建築遺産といっても、建物単体の価値・群としての価値（街並み）・コンテンツ(中身)の価値が存在する。

建築遺産を観光資源として活用する際には、文化財的価値や空間体験といった側面が重視されるものの、経済的収益を得る仕組みを構築することも重要である。一方で、「稼がない選択肢」として、地域住民の支持を得ながら保存する道も模索され、地域資源として、地域の固有性や愛着、アイデンティティに寄与することも想定される。その場合、どうやって維持管理をし、どう地域が支えるのかという課題がある。観光資源化プラス地域資源化していく、ということによって建築遺産を資源化していく必要がある。

### 2. なぜW.M. ヴォーリズに着目するのか

W.M. ヴォーリズはキリスト教の布教を目的に来日し、英語教育に関わったものの、その職から離れた後は、生活のための仕事として建築に携わった。彼が設計した建築物は、当初の目的からも信仰を暗喩するデザインが特徴であり、居住者本位の設計や快適性の高い空間構成で、今日も高い評価を得、1954年までに約1800件の設計図が確認されている。

この時代において、日本には西洋建築の考え方が入ってくるものの、いわゆる洋風建築に対応できる日本の建築技術者が潤沢にいるという状況ではなかった。ヴォーリズは、現在の近江兄弟社の前身にあたるヴォーリズ合名会社や近江ミッションという組織を作り、様々な建築設計を行った。そのうち600件が竣工、一方で現存する建築は約130件にとどまるとされる。

### 3. 現存するヴォーリス建築の実態

実際にはこうした建築物の件数は曖昧なところもあるものの、住宅・学校・宗教施設が多く、近江八幡を中心とした滋賀県内や宣教師が避暑地として集まる軽井沢にも多くの建物が残されている。

現存するヴォーリス建築は、用途や地域によってその保存状況は様々である。教会や学校は、社会的寿命が長く、維持管理主体が明確なため残存率が高い傾向にある一方で、個人住宅や別荘は相続や維持費の問題から消失するケースが多いものの、一部は用途転用により現存している。

教会：宗教的機能の一貫性が高く、保存率が高い（登録有形文化財率 約5割）。

学校：ミッションスクールのアイデンティティ体現ゆえ保存を促進（登録文化財率 約3割）。

住宅：宣教師館や邸宅の一部は転用され残存。個人所有ゆえの世代交代、居住性の向上のための改修により現存率は低い。一部の大邸宅は残りやすい。

### 4. 保存、転用、建替えの選択肢

建築遺産を活用する際に重要となるのは、保存・転用・建替えのいずれの手段を選択するかである。

保存が軸となる場合は、文化財登録・指定による保護や、組織理念やアイデンティティの継承のために進められることが多い。（例：日本基督教団大阪教会は、布教活動の継続や機能の一貫性を担保）

転用が軸となる場合は、建物の魅力はあるものの、もともとの機能をそのまま維持するのは難しいケースであり、観光施設や商業施設、資料館など新たな価値を与えることが多い。（例：旧神戸ユニオン教会だったものは、パン屋フロイドリーブとして転用。）

建替えが軸となる場合は、構造的寿命や社会的寿命という背景より、デザイン継承・部分保存を行うことで記憶をつなぐ事例も多い。（学校：プール学院中学校・高等学校、オフィス：旧主婦の友社・大同生命本社ビル、商業施設：大丸心齋橋筋店）

### 5. 現存建築の所有者と管理運営者

現存する建築の所有者および管理者の変遷について、事例を紹介する。住宅は建て変わっているが、邸宅と呼べるものは用途転用しながら残っているケースが多く、朝吹常吉邸はかつて東芝が、現在は日本テレビが所有している。駒井家住宅は公益財団法人日本ナショナルトラストが所有している。忠田兵蔵邸はクラブハリエが所有し、商業利用としている。住宅は難しいが、異なる用途に転用され、残されているケースがある。また宣教師館は、地方公共団体や民間企業その他、公益法人や市民団体が所有することもある。

（所有・管理運営主体の例）

- ・近江兄弟社グループは公益財団法人や学校法人、株式会社など様々な法人形態をもち、所有、管理運営を行っている。ヴォーリス自身と組織の縁が深く、所有ならびに管理を継続するケースが多い。
- ・ヴォーリス六甲山荘は、ナショナルトラスト運動により基金を募り、特定非営利活動法人が取得。施設の一般公開、喫茶軽食、ミニコンサート、講演会等を実施。
- ・旧駒井家住宅（京都市）  
面積敷地面積 900 m<sup>2</sup>、建築面積 154.4 m<sup>2</sup>。公益財団法人日本ナショナルトラスト（JNT）が寄贈を受けて管理運営。

JNT事務局が中心となって専門家によるワーキングを定期開催し、保護管理委員会で承認。公開などの運営や日常管理は個人に委託。

・豊郷小学校旧校舎（滋賀県豊郷町）

所有：地方公共団体、管理運営：直営

昭和12年、「丸紅」専務古川鉄治郎寄贈 町立図書館、子育て支援センターなど町の複合施設 アニメ「けいおん！」の聖地

・今津郵便局

地元有志にて、ヴォーリズ今津郵便局の会（2013年12月）発足。

旧郵便局の建物を守るための清掃・修繕等を実施。

郵便局の記憶、記録を残すための取り組み、今後の活用方法の検討

イベントの開催 展示スペースや地域コミュニティづくりの場としての活用を実施

## 6. 群としての取り組み

近江八幡では「ヴォーリズストリート」、軽井沢では「ヴォーリズレーン」として建築群を地域資源化する動きが進んでいる。単体ではなく群として価値を見出すことで、観光資源としての魅力がさらに高める取り組みがなされている。中でも、近江八幡が代表的であり、近江商人の街、重伝建地区のまちなみと、明治以降のまちなみが併存する。それをどのように魅力につなげるのか課題がある。

<継承することと、まちなかに生きること>

継承することとはどういったことか、まちなかに生きるということ、そこに“あり続ける”ことの価値について意識すべき。（市民の誇り／他地域からの支持／実際の利用／管理運営組織 等）

<地域創生戦略における建築遺産の価値>

建築そのものの魅力の本質をしっかりと突き詰めること、加えて主体的に支える組織が重要。さらに他の観光資源や他のその町の要素とどう組み合わせるのか、もしくは組み合わせない方が良いのか。ヴォーリズ建築の多くは直接支える組織が、宗教法人であったり学校法人である。これらが地域と連携し得る可能性や組織があるのかどうか。地域創生を考える時には、当然これらとどのような関係を組めばよいのかという議論が重要。

<建築遺産継承一般化の道筋：経営という視点>

建築遺産の経営という視点が重要で、文化財としての価値および地域の人たちに愛されている、誇りにされているという物差しを、経営にどうつなげるのかを考えていく必要がある。

<地域として継承する>

サンタバーバラでは、カリフォルミッシュの建築がいくつかあり、サンタバーバラの町全体にデザインコードを作った。屋根の形、色彩、建物のボリュームといったものをルール化。

<地域創生資源としての可能性>

元々の建物は、その作られた時の地域社会において、ある文脈・ある理由の下に作られる。そして、それらに時間が流れていく中、いろんな社会環境の変化、あるいは建物自身の老朽化、社会的利用のされ方の変化に直面する。保存、転用、建て替えとその選択が重要。

## 7. 地域創生における建築遺産の価値

ほとんどの施設は「観光資源化したい」ということを、最初の目標として立て、具体には飲食、体験や資料館、記念館、コミュニティ、宿泊滞在施設というような用途が想定されることになる。

ここで、さらにもう一步踏み込んで考えることができないか。宣教師たちは、日本に入ってきた時にいろんな産業をセットで持ってきた。ヴォーリズもそうだが、丹波市にはソントンという宣教師が来日し、ピーナツバターの作り方を持ってきた。北海道のピアソン記念館は、地元のハッカ記念館と連携している。こうした産業との関わりとして、企業のための施設やワーケーションに活用などにも目を向けるべきであるとする。暫定的な活用や、古材としての部材の活用などの手段もあるとする。

### ■ 質疑

Q. 近江八幡では古い建物もあるようだが、利活用が進んでいないとのこと。課題は。

A. 調査に対する、所有者の理解に課題。

Q. 保存すべき物件かどうか、客観的評価は可能か。

A. ヴォーリズ建築であるかという観点では、専門家に照会をかける形になる。

実際には図面はないが、ヴォーリズ関係者がアドバイスしたケースや弟子がやっているケースなどがあり、定義がかなり難しい部分もある。

Q. 保存や利活用には費用もかかるが、補助金だけで賄うことは難しい。課題は。

A. 入館料、見学科、物販などにならざるを得ない部分があるが、そうした物件は多くない。所有者の協力などを持ってなんとか運営できているケースが多そう。

Q. 建築を地域資源として残すのであれば、地域コーディネーターが重要ではないか。

また、そういった人はどういう方が向いているとお考えか。

A. 難しい問題であるが、経営的視点と空間的価値とを総合的、客観的に評価できる両輪体制が重要ではないか。建築を残す目的なのか、地域が元気になることが目的なのか、そういった調整を行ったうえで、保存計画とマネジメント計画を立案しコーディネートできる職能が求められる。

以上